

---

# 作家 G. オーウェルの女性観

秋 山 康 三

---

オーウェル (George Orwell, 1903-50) の小説では、『牧師の娘』 (*A Clergyman's Daughter*, 1935) が女性を主人公とする唯一の小説であり、他はすべて男性が主人公である。そこで、この作品からオーウェルの女性観について考察し、さらに『ビルマの日々』 (*Burmese Days*, 1934), 『葉蘭を風にそよがせよ』 (*Keep the Aspidistra Flying*, 1936), 『1984年』 (*Nineteen Eighty-Four*, 1949) へと3つの小説に登場する女性像に論考を進めていくことにする。

## 1

『牧師の娘』はオーウェルの第3作目で、次作の『葉蘭を風にそよがせよ』とともに、残部は回収して破棄したといわれるほどだが、女性を主人公とする唯一の小説であるため、この作品は「他の作品のいずれとも異なった味わい (a different flavour from any of his other works) をもっている<sup>1)</sup>」と T. ポプキンスンは述べている。

作者自身は「これは習作として書いたにすぎず、出版すべきではなかったが、なにしろ金に困窮状態だったので」と言って、同じことが『葉蘭をそよがせよ』にも言える<sup>2)</sup>と述べる。たしかに、これらの作品執筆時代は彼に定職といえるものがなく、生活と苦闘していた時期である。家庭教師、浮浪生

活、ポップ摘み、教師と、こうした不安定な生活も、彼自身が選んだものであれば、彼の作家的意図からとも言えよう。なぜなら、当時の彼の体験のほとんどは、直接、間接に彼の作品に素材として組みこまれているからである。

作者の言葉からすれば、『牧師の娘』は文学作品としては完成度が低いということになる。主人公のドロシー・ヘア (Dorothy Hare) の女性像に原因があると考えられる。さらに彼の女性観がドロシー分析によっても部分的に浮き彫りにされるはずである。

5章から構成されている、この小説はドロシーの記憶喪失に陥る事件が最重要点であり、(1)記憶喪失以前の主人公の信仰と生活、(2)記憶喪失になっていた頃の放浪と労働、(3)記憶恢復後の主人公の生活と意見、といった三つの時期に分けて論じられよう。

第一の時期では、牧師館の貧しさをいやというほど思い知らされるドロシーは、家事と教区の雑務に忙殺されて身も心も消耗する。第一章は彼女のこうした1日を克明に語ることで費やされている (彼女は『パリ・ロンドンどんだ生活』のパリでの皿洗いの人物と同じく1日約17時間半、働くことになっている)。

彼女は並の器量といったところ、また、美しいとはいえない、男たちがいつもながら言いよってくるタイプの女であった。男というものは、その場の気まぐれに楽しみたいと思えば、あまり美人の娘は選ばないものである。きれいな娘は (と男の考えでは) ちやほやされているから心変わりしやすいが、器量のよくないのはすぐカモになる。だから、たとえば牧師の娘で、ナイズ・ヒルのような町に住み、年じゅう教区の仕事に追われていても、男に追いかけられずにすむわけにもいかなかった。ドロシーはそれには馴れっこになっていたし、——目にいかがわしい、ものにできるという色をうかべた、小肥りの中年男にはすっかり馴れっこ<sup>3)</sup>になっていた。

この女性が、自称画家のウォーバートン (Warburton) に露骨に言い寄られ性的嫌悪によるショックと過労から突然記憶を喪失し、気がついたときはロンドンの街を放浪している。記憶喪失以前の彼女は日々の過労も克服しようと冷水浴をしたり、腕に針を立てたりする異常な自虐性をもつのは、「彼女が選んだ自己鍛練の形であり、不敬と不信の念に対して自分を守る手だて」

(her chosen form of self-discipline, her guard against irreverence and sacrilegious thoughts)<sup>4)</sup> であるとは、牧師の娘の描写としてはいささか疑問に感じる。記憶とともに信仰も失った彼女は、ノビー (Nobby)、フロ (Flo)、チャーリー (Charlie) たち浮浪者と出会い、仲間に入れてもらい、ケント州の農場へホップ摘みの仕事をみつけに出掛けるのだが、その旅は飢餓、不潔、疲労、足の痛み、天候、不眠がつきまとい、残飯あさりや物乞いもあたりまえの旅である。記憶を喪失していたのは10日間、その間の事情は説明されていない。だが、ナイプ・ヒルからロンドンに出てくる途中で、持物だけでなく、自分の身元も喪失することが、ずっと首にかけていた金の十字架がなくなっており、自分の名前も忘れてることによって象徴されている。

緑のホップ畑の世界で、生まれてはじめてというほどの幸福も、オーウェルの言うように夢の中での体験だが、夢がさめれば外の世界、彼女の相棒のノビーがリンゴを盗んだというために逮捕されると、そのショックで正常にもどるようになる。彼女はホップ摘みの連中が噂していた、牧師の娘の失踪とそれにまつわるスキャンダルを思い出し、すぐに自分の身元を悟るのである。

彼女は牧師館に帰ることが、自分のことで不当な中傷にさらされることから帰れず、牧師館で女中 (お手伝い) をしていたエレン (Ellen) ——この名前は記憶喪失時にも彼女の意識の中に浮かんだ——を使って雑役婦で働こうとする。だが、どこの主婦も彼女の頼みを拒絶する。

さしあたり職さがしもむなしく続けてみたものの、彼女の金は1日1シリングの割で減っていった。この金額は慢性的な飢餓状態ながら彼女を生かしておけるだけのものでしかなかった。……また、まことに妙なことだが、ひもじさが募り、勤めのもてる見込みも遠のくにつれて、初めはうろたえる気持ちも消えうせ、言葉にならない、みじめな無感動に変っていった。辛い思いもあったが、さして怖いとは思わなかった。これから落ちてゆく奈落の世界は近づくにつれて、恐怖はうすらいでいくようであった。<sup>5)</sup>

粗末な部屋の「メアリーの宿」も、部屋代が払えぬとあって追い出されるように歩き続けて、たどり着いたのは「引力の働きの宿なき人をすべて引きよせる場所、トラファルガー・スクエアであった」<sup>6)</sup>骨身に滲みる寒さの夜を浮浪者にまじって過ごすという、悪夢的場面である。10人余りの浮浪者たちが、各人各様に勝手気ままな断片的な言葉を語る。作者は、この場面をこの小説の中では「気に入っている」唯一の場面<sup>7)</sup>と言う。また、ヘンリー・ミラー宛の手紙では「この作品は支離滅裂ですが、いささか実験をした個所もいくつかあって、私には有益でした」<sup>8)</sup>と書いている。だが、ウッドコックは「この場面を描写するのに、オーウェルは自分のロンドンでの浮浪者生活の経験や観察をへたにドロシーの物語につなぎあわせているという事実を隠そうと自分流儀な文学的技巧をこらしているため、この小説での最大の弱点になっている」<sup>9)</sup>と評しているが、穏当な意見と考える。

乞食を常習的にした科で彼女は逮捕されると、ようやく娘の身を案じるようになった父親の親戚への依頼で、彼女はロンドン郊外の私立学校の教師になる。父親の牧師は、なんでも深刻な心配事があると金持ちの親戚に助力を求めるのが第二の天性<sup>10)</sup>とかで、庶民的な生活感覚にうとく、娘が手紙で送金を求めても返事ひとつ書かない人物である。

オーウェルがつくりだしたリングウッド・ハウス学園 (Ringwood House)

には彼女は気が滅入ってしまう。けちくさい、陰気な建物とちがって多少ましな人物が校長と思いきや、クリーヴィ夫人 (Mrs. Creevy) は40がらみの、やせて、骨張った顔、テキパキした動作を見ても意志強固で癩癩もちらしさがうかがえた。声もかん高い、威圧的で、形の悪い口からひどいアクセントで、時折は卑俗な言葉づかいもする。「人を利用しておいて、そのあとは使い古しのタワシのように委細かまわず投げ捨てる」といった人間 (a person who would make use of you and then throw you aside with no more compunction than if you had been a worn-out scrubbing-brush<sup>11)</sup>) なのである。この信心家ぶった偽善者・吝嗇家として、うまくオーウェルが創作した人物であることはまちがいない。ただし、イギリスの私立学校の実態の非教育的なことには我慢ならぬとばかり、この小説家は女主人公の暗い生活描写の途中に割りこんで長々と論ずる<sup>12)</sup>。この小説の主題が、私立学校教育の欠陥を糾弾することと関係があるとは考えられないのであるが。

さて、見通しくらく、絶望的な状況のなかで彼女は人生の意義を見出そうと努力を傾倒する。かつての彼女にとって最も貴重なもの、宗教をも失ってしまっているからだ。終章において、「信仰なき我を助け給え〔マルコ伝、9．24〕」と彼女が祈るとき、その解答は膠の匂いであった。

彼女の苦悩に対する解答は、解答そのものが存在しないという事実を容認するにあることを、もし人が手近にある仕事を継続していけば、その仕事の究極の目的は色あせて無意味なものにもなることを、はたまた、信仰のあるなしは、人が習慣的に、有益に、意にかなう仕事を続ける限りはほとんど同じだということなど、彼女にはわからなかったのだ。<sup>13)</sup>

ここで、『牧師の娘』の筋の展開に関わりを持つ重要人間、ウォーバートンに再登場してもらわなくてはならない。彼はドロシーをリングウッド・ハウス校から牧師館に連れかえる車中、自分自身が宗教を話題とすることに退屈

な無神論者なので、言葉を尽して今後は牧師館でやっていたような仕事はやめるようにと説得しようとする。彼のたくみな話術や説得にはいい負かされても、彼女は教会での生活を断念しようとはしない。突然彼は話題を変え、彼女に結婚を申込む。彼女の性的嫌悪にもかかわらず、彼女は彼に「女性にはめったに見られない、むとんちゃくな気らくさと知的な寛大さ」(the careless good humour and the intellectual largeness that women so seldom<sup>14)</sup> have)が魅力で、彼には「よそでは得られぬような共感と理解」(a species of sympathy and understanding which she could not get elsewhere<sup>15)</sup>)を期待はするが、彼の求婚ははっきり断る。彼女がいつまでも独身でいるとどうなるかと、彼は次のように熱心にくどくのだが……。

女性には結婚しないと枯れきってしまう——陽あたりの悪い部屋の窓辺の葉蘭のように枯れるんです。恐ろしいことに、自分が枯れしぼんでゆくのが本人にはわからないんだ。<sup>16)</sup>

こうしてドロシーは田舎町の牧師館に帰って行き、父親と2人だけの生活にもどるが、かりに彼女が求婚した男性と結婚したとしてもあたたかい家庭が築かれる可能性は全く示唆されていない。女性として彼女が未成熟のままに終るのも、生来の心理的かつ生理的異常によるもので、その障害を克服しようにもその認識がなかったためである。いかなる体験を重ねても知的成長を遂げず、状況の変化に対応するにも鋭い感性と冒険的経験の主人公には女性が適当していると、オーウェルは自ら共感しえない人間像を創造したのではあるまいか。ドロシーの性格描写に、女性を受動的で発展性のないものと表現したところに作者の女性観がうかがえる。



イギリス中産階級のすり切れた体面の象徴ともいえる葉蘭は『葉蘭をそよがせよ』(1936) (以下『葉蘭』と略記) では、曖昧なシンボルとなっている。この小説の主人公ゴードン・コムストック (Gordon Comstock) は枯らすことがほとんど不可能な植物に対し挑戦を続ける。

『葉蘭』は自伝的要素の強い作品といわれているが、たしかにゴードン<sup>17)</sup>の出身階級、パブリック・スクール、気にそまぬ就職、貧窮そして本屋の店員といった経歴・背景はオーウェル自身のそれと酷似している。

主人公は売れない詩人で自分でつくった道徳律にしばられ、進んで貧乏生活を求め甘受し、歎いて、金というものに成立する社会に非難と追求をこの作品の終りまで続ける。金がないために自分が軽蔑されていると感じる劣等感と金銭での強迫観念は密接にからまり合う。

人間関係はすべて、金で買わなくてはならない。金がなければ、誰も相手にしてくれないし、女性は決して好きになってくれない。……だが好きになってくれなくても彼女らは正しいのだ！ 金がないものは愛の対象にはなれないのだ。<sup>18)</sup>

ゴードンは、学費が年に120ポンドもする学校に入れられた。家計への大変な負担であった。一方、5歳年上の姉ジュリア (Julia) は教育らしい教育をほとんど受けなかった。これは、ゴードンが「男の子」、ジュリアは「女の子」であれば、「女の子」は「男の子」の犠牲になるのはやむをえない、というよりは当然だ、と誰もが思っていたからである。この事実は、オーウェルの生<sup>19)</sup>い立ちから考えて虚構とはいえないのである。

オーウェル自身、8歳の時(1911年9月)に私立の予備学校セント・シブ

リアン校に入れられ、その後、イートンへと進む。学費減額、あるいは、奨学金という特典を得てのことであっても、ブレア家（オーウェルの本名は、エリック・アーサー・ブレア）の家計には相当な負担になっていたようである。こうした、いわば身分不相応な学校に身を置くようになった理由の一つに、息子にだけは立派な教育を身につけさせ、何とか上流社会に出させてやりたい、という親の切ない願いがこめられていたことは明らかで、オーウェル自身も次のように書いている。

この階級（上層中産階級）の特色は、その最大の支出項目が教育費だということだ。裕福な商人でも息子は地方のグラマー・スクールに行かせるのに、牧師は、その半分の収入しかなくても、食うものもろくすっぽ食わずに息子をパブリック・スクールに入れる。かけた金がすぐに戻って来るものでないことは承知の上なの<sup>20)</sup>に。

オーウェル自身は、自分の出身階級を「上層中産階級の下」(the lower-upper-middle class)<sup>21)</sup>と位置づけているが、彼とそれぞれ5歳違いの姉と妹は、11歳になってからオックスフォードの女子寄宿学校へ入れられた。決して一流とか、有名という学校ではなかつた<sup>22)</sup>のである。

さて、ゴードンは、金銭中心の社会に反抗し、葉蘭を窓辺に飾るという、ささやかな幸福感を味わえる中産階級的生活を拒否して、あえて下層生活に沈みこむ。こうした彼の姿は深刻感を含む一面もあるが、いささかユーモラスな印象を読者に与える。縁故で得た広告代理店員の「良い職」から薄給の書店員に、結局、主人公は恋人ローズマリー（Rosemary）の妊娠を契機に、元の広告代理店に再就職して彼女と結婚することになる。

ゴードンは、女は拝金主義者——自分自身は金銭や拝金思想と戦っているつもりなため——であり、金のある男しか愛さないことでは彼の恋人も同じで、彼女との結婚は彼をも墮落させようとする「金<sup>マネー・ゴッド</sup>の神」の仕掛けた罠だ、



とまで考える。しかし、性欲とともに、たえず金がないという意識に彼はとりつかれている。愛人ローズマリーに会っても軽蔑されることが恐ろしく、「私が勘定をもつから一緒に食事に行きませんか？」と言われても、彼は拒みつけ、口論のはてに次のように言う。

ある意味で君はぼくを軽蔑しているんだ。そりゃ、君はぼくが好きだ。でも、君は本気じゃないんだ。遊んでるような気持ちなんだ。ぼくのことが好きでも、ぼくには君と対等とは言えない——それが君の気持ちだよ。<sup>23)</sup>

彼は自分のやり場のない卑屈感も女に転嫁し、自分の生活に心の温かさと慰めをもたらさない、といい、愚痴っぽい口調で「いったい、ぼくと寝る気があるのかい？」<sup>24)</sup>と彼女にたずねたり、ロンドン郊外の木立ちのなかで女に愛の証しを求めて挑んだりする。

愛する女性、ローズマリーは聡明で思いやりがあり、率直に愛を打ち明けているのに、ゴードンは素直に受け入れようとせず、恋愛に当然あるべき情熱、歓喜、陶醉など感じられず、支離滅裂な、ぶざまな行動に走ったりする。彼は、アメリカに送った詩が売れて手に入った10ポンドで、ローズマリーと唯一の友人ラヴェルストン (Ravelston) を食事に招待したのはよいが、酔っぱらって留置場に入れられ、住居を変え、職場もやめさせられてしまう。見すばらしい貸本屋の店員となった彼は、ますますの窮乏生活を送るはめになる。思いあまった彼女は自分から進んで彼と結ばれるが、彼にはさして感動も覚えることがない始末である。

しかし、その転機は、ローズマリーが彼に妊娠を打ちあけたことから訪れる。彼女を不幸にはできない、と彼はもとの広告会社、ニュー・アルビヨン社に復帰して彼女と結婚、貧乏生活と絶縁する。それどころか、中産階級の象徴というべき〈葉蘭〉の鉢を窓辺に飾ろうと言いだす。

この小説の結末は突飛な逆転を読者に印象づける。初めの方では、ゴードンは葉蘭に敵意をもやし、枯らそうとして「水をやらなかったり、熱いタバコの火を茎にこすりけたり、塩を土にまぜたり、しかし、この怪物は実に不死身で、ほとんどどんな環境でも、しおれ病みながらも生きつづける<sup>25)</sup>」この植物は、ゴードンの意識の中に生きつづける中産階級意識の頑強さと共通するものなのだが、彼は次元の低いものと見做してきた家庭と、家庭の幸福を、抽象的観念よりも優先させ、中産階級意識は圧殺してはならぬと気づいたからこそ、その象徴としての葉蘭を窓辺に飾ることになったと理解する。ただ、説得性に弱い、というためにゴードンが救出されたとする見方もあれば、彼の敗北とを感じる見方と二通りの批評家による解釈が生じる<sup>26)</sup>のもやむをえないことであろう。

### 3

ジョージ・オーウェルの女性観の一端をうかがえるものとしては、彼の最後の小説『1984』に好例を見ることができるであろう。

主人公ウィンストン・スミス (Winston Smith) が超大国オセアニアの完全管理体制のなかでたどる反逆と破滅の過程を描いたこの小説で、ウィンストンはほとんどすべての女、特に、若くて美しい女を嫌った。なぜなら、党の最も狂信的な信奉者、スローガンの盲目的な支持者として、異端者発見の素人スパイ役は、きまって女、それも若い女だったからである。

ある日、彼は勤め先、真理省 (The Ministry of Truth) の廊下で、省内のべつの部課につとめる女ジュリア (Julia) から愛の告白の紙片を渡される。二人は首尾よく一日をともに過ごし、野外で愛の契りを交わす (出会いとこの交情の場の設定も『葉蘭』のゴードンとローズメアリーの場合と同工異曲である)。それ以来、彼らは示しあわせて密会を重ねるようになる。

ジュリアは26歳、〈青年反セックス連盟〉に所属し、党には忠実に活動して

いるように見せかけてはいるが、実は身の安全のためのカムフラージュで、党に対しては憎しみを抱いているとウィンストンに告白する。彼女はある意味では彼よりもずっと鋭く党の宣伝の虚偽を見抜いていたからである。しかし、彼女は「読書なんてどうでもいいわ」と言う。そして、

党の教義に関する細かい理論構造についても、彼女は少しの関心も抱いていなかった。彼(ウィンストン)がイングソック (English Socialism からつくられた公用語, Ingso)の諸原則、二重思考、過去の可変性そして客観的事実の否認などについて語りはじめ、新語法を使い始めたりすると、彼女はいつも退屈になってしまい、混乱してしまい、そんなことには一度も注意を払ったことがない、と言うのだった。……彼がそうした話題をあえて話し続けると、すぐに眠ってしまう困った性癖が彼女にはあ<sup>27)</sup>った。

事実、ウィンストンが「例の本」を読んでいる間、彼女はその横で眠り続けているのである。この女性によって、彼は死に追いやられることになるが、思想警察に逮捕されるや、すべてを先に自白して彼女はウィンストンを裏切ってしまうのである。

主人公には10年以上も別居（実際には離婚）している妻のキャサリン (Katharine)がいたが、この妻は党と国に捧げるために子供を生む、そしてそのためにだけ夫婦生活を営む、という党の方針に従って別居したのであった。子供が生まれず、15か月間の結婚生活を送ったあとは、一人で寒々としたアパート暮らしである。孤独に生きるウィンストンにとっては、彼を洗脳し死に追いやる「中核党」(Inner Party)のエリート、オーブライアン (O'Brien) が心の支えとなる存在に錯覚されたのもやむをえない成行きであろう。ましてや、主人公は「外部党」(Outer Party)の一員として、「テレスクリーン」(telescreen)によって私生活の自由を完全に奪われているとき、ジ

ユリアとの禁じられた性愛関係に誘われたのも、愚かとはいえ首肯できる話の展開である。彼女にはそのつもりがなくても、結果的には「<sup>パワー・ゴッド</sup>権力の神」の手先となった彼女の手で心も行動も異端者となったウィンストンを破滅に追いこむのである。もっとも、真実の歪曲、事実の抹消、記録の改竄、等々の仕事に従事しなければ、彼も懐疑心をたくましくすることもなかったろうが……

オセアニアから受ける最大の戦慄は、思想警察によって逮捕された後のウィンストンの運命からである。彼は処刑をすぐ受けることがなく、長期にわたって拷問をうけ、洗脳をうける。精神の内部にまで完全に支配をうければ、2+2も党の命じるままに3にも5にもなりうる。処刑の日を待ちながら「偉大なる兄弟」(Big Brother)に対する感涙にウィンストンがむせぶラストシーンは、強烈なアイロニーであり、暗い気持ちに読者を駆りたてる。

「もし希望があれば、それは<sup>プロレタリア</sup>下層労働階級のなかにある」と言うウィンストンの言葉にはむなしい響きがこだましてくるが、歌いながら洗濯ものを乾している、たくましい肉体のプロールの女。これら85%を占める階級にこそ未来の希望があると思ったウィンストンは、突如ふみこまれた思想警察の男たちにユリアとともに逮捕連行されることになる。二人に密会場所を提供した、表面上は好意を示したチャリングトン (Mr. Charrington) はよぼよぼした老人の姿でなく、35歳の壮年で二人の逮捕の指揮をとったのであった。

主人公を裏切り、破滅に追いやった、という意味では、『ビルマの日々』(1934)の主人公ジョン・フローリ (John Flory) の人生を狂わした女性登場人物は、マ・ラ・メイ (Ma Hla May) とエリザベス・ラッカースティーン (Elizabeth Lackersteen) である。この作品は、イギリス帝国主義下のビルマに舞台が置かれ、権謀術策を弄するウ・ポ・キン (U Po Kyin) の仕組む陰謀にそって話の筋は進行する。

材木会社のビルマ駐在員として長く現地生活を続けるフローリは、反英的感情と原住民に共感をもつ善意の白人である。彼は故国イギリスから隔絶さ

れて孤独であるのはもちろん、立派な「旦那衆」たるべき白人仲間からは異端者視され孤独である。彼のいなく異端者意識は——生まれながらの痣 (birthmark) によって象徴されるが——劣等感や羨望と微妙に結びつき、皮肉っぽく、また、反抗的に増幅されていく。彼は女に求愛する前にも「この痣が気にならないか」と確かめずにはいられない男なのである。

彼には、ビルマの人間、生活、自然、文物など、すべてに愛情を持っている。彼の居住するチャウタダには、イギリス専用のクラブがある。現地人は高級官吏や金持でも、いかに入会を切望してもむりであり、事実このクラブは一度も東洋人を入会させたことがないのを誇りにしている。フローリは、イギリス人社会で自分の立場が不利になるのを承知の上で、ビルマ人医師ヴェラスワミ (Dr. Veraswami) をこの会員にと推すのである。第一次大戦後の風潮で、民族独立意識の高揚がインドやビルマに起った時代にあって、ビルマ各地のクラブは今まで拒否してきた現地人の入会を次第に認めるようになっていた。そこで現地人の入会を総督が命令し、それが総弁務官からクラブの一員であるマグレガー副弁務官へ通達され、無為と退屈に過ごしていたクラブ員たちは、この通達で俄かに緊張する。

遠慮しながらも入会を望むヴェラスワミという好人物と、チャウタダ地区の治安判事ウ・ポ・キン。刑務所長でもある医師ヴェラスワミはフローリが現地人ではなく、男としての友人として考えるのに対し、ウ・ポ・キンは狡猾、イギリスの寄生虫になる以外に出世の道はないと考えている反面、晩年には仏塔を建てるなど善行を積み来世も男に生れ変ってこよう——女はせいぜい鼠か蛙、よくても多少ましな象ぐらいの価値しかないんだから——<sup>28)</sup>と考える人間で、成り上がり者、俗物、金の亡者である。この U Po Kyin の描き方は自然描写とともに見事であり、作者オーウェルがこの点をもっと明確に意識していたら物語の展開が恐らく少し変わっていたことであろう。これは、フローリの性格の曖昧さが意識されるからであり、彼が本当に帝国主義の支配体制に反逆し、現地人に善意と共感を抱いていたとすれば、金でビルマ人

を情婦にもち、金で彼女を追い出したりはしなかったであろう。また、俗物性を具えたエリザベスに対して自分の孤独から逃がれる道を結婚に求めようとしたであろうか。フローリに見られる矛盾は、観念と現実との乖離なのである。しかし、重要なことは、この小説は単に失恋の悲劇や、ビルマに偶然起こった主人公の人生の破綻を描いたものではない、植民地ビルマにおける英人支配の政治情勢と不可分であるという点である。そうした政治的環境の産物であるフローリの孤独と破滅という観点からすれば、『ビルマの日々』は政治小説と呼べるであろう。イギリス人クラブ会員に現地人を選出する問題にからむウ・ポ・キンとヴェラスワミの対立がフローリの破滅の一因であり、両者の性格を形づけるものは即ち、イギリスの植民地政策による現実の支配・被支配の關係に他ならない。せんじつめれば、当時のビルマにおける政治的体制そのもので、体制と個人との軋轢の問題に帰するのである。

ところで、オーウェルはビルマ人をどう見ていたであろうか。彼はつぎのように述べる。

重要なことは「原住民」、とにもかくにもビルマ人は生理的に不快感はいだかなかった。「原住民」と見くだすこともありえたが、生理的にはすぐに親しくなれたし、有色民族へのまちがった偏見をもっている白人にあてはまることだと気づいた。……着脱衣するのをビルマ人少年にさせるのも、彼がビルマ人であり、嫌悪感がなかったからである。イギリス人の男の召使いなら、なれなれしく身の廻りの世話をされるのには堪えられなかっただろう。私のビルマ人に対していただく感じは、女性に対する感じ方に似て<sup>29)</sup>いた。

なお、オーウェル自身は、ビルマ人の召使たちに着替えを手伝わせていたが、時には彼らを蹴ったり殴ったりしたこともあったという。<sup>30)</sup>

さらに独得の体臭をもつビルマ人、肌は絹のよう、毛深さやひげもない、



禿げることも滅多にない、などとオーウェルは書いて<sup>31)</sup>いるが、これは女性の外面的特徴であり、彼の性的嗜好をうかがわせる。

また、女性を自制心に欠け、理性よりも感情に支配されやすく信頼が置けない、無分別といえるほど残酷で、ヒステリー傾向があると内面的な特質を見、原住民たちも持っていると<sup>32)</sup>する。

さて、フローリはウ・ポ・キンから匿名の脅迫状を受けとって重大事とも考えず、ヨーロッパ人クラブが原住民の暴徒たちによって取り囲まれても、半ば超然とした気持ちでその光景を見てもあまり恐ろしさを感じない。東洋人が本当に危険な存在になろうとは彼には信じ難いことであつたし、植民地に於ては「白人は原住民の前では恐れをいだいてはならない。一般的に、恐れ<sup>33)</sup>もしない」のである。われわれの社会では、集団でも女性から暴力をふるわれるとかその恐怖感をいただくことはないので、原住民を女性と見立てれば恐ろしくはないのである。その原住民の世話をし、躰けるのがイギリス人の役目であり、イギリス人なくしては彼らには何もできない<sup>34)</sup>、と考える女性蔑視の姿勢に通じていく。

フローリには、マ・ラ・メイという現地妻がいるが、彼女には内証にしているビルマ人の恋人がいる。彼女が愛しているのは故郷に帰れば「白人の妻」と自慢でき、気楽に生活できることで、フローリではない。しかし、エリザベスが彼の前に姿を見せるや、彼の心はエリザベスに向いてしまい、マ・ラ・メイは捨てられる羽目になる。「彼女は彼から引き出した金を貯えておくだけの知恵がなかつた」<sup>35)</sup>愚かしさのために、フローリを陥れる機をうかがっていたウ・ポ・キンに心ならずも利用される。彼女がフローリをイギリス人たちの面前で恥をかかしたことは、いったんは男らしさにヴェロール (Verrall) に心移したエリザベスもフローリに愛想づかしをして副総弁務官マグレガー (Macgregor) の求婚を受け入れることになる。年はいささか取っていても、マグレガーの地位にひかれたのである。マ・ラ・メイとエリザベスという二人の言動に女性の打算と狡さを作者は付与したのである。もし、マ・ラ・

メイがウ・ポ・キンの唆しに乗ってクラブの全員がそろっている教会の礼拝式に飛び込んできて、フローリの行状を暴露しなければ、あるいはエリザベスがフローリの行為を許して縊りを戻したとすれば、主人公のピストル自殺もなくなり、この小説の結末はどうなっていたことであろうか。また、フローリはビルマまで来なければ就職口を与えてくれなかった母国に恨みを抱いていたのではないだろうか。

憲兵と名乗るヴェロールはもと騎兵隊の将校、部下の憲兵を見る眼は苦力を見る眼と変りなく、女に対しては男をポロから引き離し、テニスやティーパーティに誘いこむことしか知らぬ人種で<sup>サイレン</sup>魔女のようなものとする女嫌いの人物。もちろん、若い男であれば彼に色目を使う女たちの誘惑に負けることがあっても、暫くすれば嫌気がさし、危なくなりそうなら、あっさり別れる、というのがインドに来てからの2年間である。フローリから心に移したエリザベスも例外ではなく、別れも告げずにヴェロールは彼女を捨ててしまう。乾し草と穀物を商う飼料屋がかなりの未徴収の金を残したまま行かれたことにひっかけて、作者オーウェルが「ヴェロールが汽車を早めに発車させたのは、エリザベスから逃げるためであったのか、飼料屋の手を逃れるためであったのか、<sup>36)</sup> 解明されなかったが興味ある問題であった」と書いているとき、冷めた皮肉というか、溜飲を下げる思いがオーウェルになかったであろうか。

#### 4

「南ビルマのモールメインでは、私はたくさんの人たちから憎悪されていた。」という印象的な書き出しから始まるエッセイ *Shooting an Elephant* (1936)では、「帝国主義であり、警官の仕事はやめて逃げ出すのは早ければ早いほどよい」と決意し、「理論的には私は完全にビルマ人の味方であり、彼らの圧制者であるイギリス人の敵であった。」と書くオーウェルだが、街角に

立ってヨーロッパ人と見るとあざける仏教の僧侶には特に腹をすえかねて、「この世の最高の喜びは坊主どもの腹に銃剣をつきさすことであろうとも考えた」ほどで、ビルマ人が身の安全がはかれるときはいつも、彼にいたずらを仕かけ、あざ笑い、と憎しみの対象になっていれば、行き場のない感情は「帝国主義にありきたりの副産物である。」と述べる。

真実のために（「大部分は見たままを記録したといつてよいものである」<sup>37)</sup>）不本意な内容は、1925年ラングーンにオーウェルを訪ねたイートン校時代の友人クリストファー・ホルス（Christopher Hollis）によって「懲罰もなければ、鞭打ちの刑もないやり方では、パブリックスクールならいざ知らず、ビルマ人相手ではダメなんだとオーウェルは語っていた」<sup>38)</sup>という証言で裏付けられる。

ホルスはつづけて「ビルマにいた人たちが証言してくれると思うが、オーウェルはたいへん立派な警察官だった（実際にだれか名前をあげて証言させてはいない）、最後にビルマでのオーウェルについて次のように述べている。

私があとで知ったことで、たいへんオーウェルらしいと思ったのは、彼がその当時、インド人女性と結婚したために、ラングーンのイギリス人社会から村八分の制裁をうけていたひとりのイギリス人とつきあうべきだと主張していたことだ。オーウェル自身はこの結婚を愚行だと見なしていたようだったが。<sup>39)</sup>

ところで、オーウェルは約5年間のビルマ生活のなかで心を許しあえる白人の友人はひとりもできなかったようである。彼の短い一生で、数多くの友人をもっていて、そのほとんどの人たちと死ぬまで交際をつづけた彼が、である。彼がビルマに来る3年前の1919年成立した「インド統治法」（the Government of India Act）がビルマを同法による改革の適用外にしたことに端を発し、翌年にはラングーン大学の総合大学化に便乗した全寮制化計画が学

生の反対ストをひき起し、全国に反英闘争が強まり、さらにストがビルマ全土に続発、仏教の僧侶を中心にしたイギリス製品ボイコット運動が強化されていた<sup>40)</sup>、このようなとき、このような場所で、植民地の若き警察官に、固い友情で結ばれる友人ができるのが自然である（現地人に友人ができなかったのはやむをえないことであるが）。

おそらく彼は支配者として威厳を保ち、現地人を取り締らなければならない、白人社会の掟に縛られる立場と、権力に反抗し、弱者に味方したい気持ちの相克に終始した現地生活だったと想像される。実際には、心の苦しみをうちあけられた。相手は行きずりの、見知らぬイギリス人ではあったが……。

列車のなかで一夜を、私はひとりのイギリス人と一緒に過ごしたことがある。ビルマで教員をしている男だったが、会ったのは初めて、名前はずいぶんわからなかった。むし暑くて眠れなかったので、二人で一夜を語りあかした。最初の30分ほどは、互いに注意深く腹をさぐって、大丈夫とわかったので、列車が漆黒の闇のなかをガタガタゆれながらゆっくり走っていくあいだ、寝台に坐って何本もビールを空けながら、大英帝国を罵倒しつづけた——内面から、理論的に、そして心の底から。二人ともいい気分になった。だが二人が話していたことは禁制の内容であり、ほのあかるい朝の光のなかを列車がマンダレーに入ると、われわれ二人は密通しあっている男と女のようにびくびくしながら別れたのである<sup>41)</sup>。

またビルマ在住のイギリス人は大部分がビルマ語やヒンズー語ができず、これは同期の警察官も同じことだったが、彼はこの両方の言語をわけなく習得し、寺ではビルマ人僧侶と議論もした<sup>42)</sup>というが、親しいビルマ人はできなかった。彼が孤独の苦しみに悩まされていたことはまちがいない。

ビルマで警察官の同期生として訓練を受けたロジャ・ビードンは次のように言っている。

彼はなかなかいい男でしたが、自分の殻にとじこむところがありましたね。私はクラブによくでかけて、玉突きをしたりダンスをしたりして遊ぶのが好きでしたが、彼ときたら、こんなことにはまったく興味がないようでした。……彼が女性の連れと一緒にいるところなど、まったく見たことはありません。<sup>43)</sup>

材木商フローリがクラブを好まなかったように、警察官オーウェルもクラブを好まなかったので、彼が「クラブに向かない人間、孤独な、風変りな人間」<sup>44)</sup>と、クリック (Bernard Crick) は言っている。

「1927年の夏、ビルマを離れて、オーウェルはついに作家への道に入ってしまった」<sup>45)</sup>が、帰国の途上、船中で、イギリス帝国主義が罪であること、だが、植民地を失えばイギリスは貧しくなり、大英帝国に代って日本という「新興の帝国」(『ビルマの日々』では、フローリとインド人医師ヴェラスワミとの会話に日本が出てくる)の脅威が増すだろうことを考えたことであろう。この作品がビルマを去って7年目の1934年、3年前の1931年には満州事変に始まる日本の大陸進出があったことから「新興の帝国」がビルマを支配する日を微かに作者は予感したのであろう。

「半分悪魔で半分子供」の有色人種に対する生殺与奪の権力を持った立場にあって、彼自身がいかなる経験を、作品で示された事柄以外に経験し、いかなる事を行ったかについては、彼の正直さが沈黙を守らせている。1927年、24歳にしてイギリスに帰って、彼が語ったものは、ビルマの鳥、花、樹木、寺院、仏像のことであつた。<sup>46)</sup>「私は自分が償わねばならない、限りない罪の重さに気づいていた」<sup>47)</sup>という彼の言葉には、よほどのことがなければ、書かれなかったであろうし、「マンドレーからウィガンへの道は遠い。その道を私が選んだ理由は、簡単には判らない」<sup>48)</sup>という言葉に秘密を解く鍵がある。

オーウェルは8歳まで母、姉、妹と女性の間で育ち、4歳の時に3か月見ただけという父は、いつも「いけない」とばかり小言をいうばかりのため、「大人で私が好きだったのは母親だけだった。しかし母親に対してさえ、はるかしくて心の中で思っていることをほとんど言えなかったという意味では、信用していたとはいえない」と、「その喜びはかくばかり」(*Such, Such Were the Joys*, 1953)と言い、イートンの学友は、母親が本とか政治問題とかにはまったく興味を示さない単純な人間だ、などと人前では悪口をいっていたが、<sup>49)</sup>彼が母へ強い愛情をいだいていたことは明白だった、と述べている。

彼はセント・シプリアン校で猛勉強のすえ、1916年ウェリントンとイートンという超一流のパブリック・スクールの奨学金を得ることに成功したが、この学校で得たものといえば大きな劣等感であった。彼は、「金がなく、体が弱く、醜く、人気がなく、慢性的に咳が出、臆病で、それに悪臭ももっていた。勝手な想像から言うのでは絶対でない。魅力のない生徒だった。以前はそんなことはなかったかもしれないが、この学校でそうなったのだ」といって、

私が成功することなどはありえない、という確信が心の中に根深くしみこんで、大人になってからもかなりの間は私の行動に影響を与えた。30歳ぐらいになるまで、いつも自分のやることは必らず失敗するのだ、<sup>50)</sup>また、あと数年しか生きられないのだ、と仮定して人生設計をした。

もちろん、母親にはいわなかったと思われる。だが、当時の彼を知っているもののひとり、女友達のジャシンサ・バディコム (Jacintha Buddicom) は彼が子供のころ一緒に楽しく過ごした時期をあえて無視したことに反駁し、「ビルマでのひどい体験と不幸な社会の底辺での生活のあとなので、この時



期は楽しかったがために故意に消されてしまったのでしょうか<sup>51)</sup>」と疑問を投げかけている。

11歳のオーウェルより2歳年上の、この女友達とは家族ぐるみの付き合いから、2人の交際となり、やがてオーウェルは彼女に求婚するがイートンを卒業する前後の頃と想像されるが、彼女が断ったあと、1922年以後、2人は会うこともなかったという<sup>52)</sup>。

いつの日か求愛させてほしいと希望する女性、エリノー・ジェイクス (Eleanor Jaques) も、1932年夏頃には存在したが、片想いに終わってしまう。しかし、彼女にあてて「求愛させてくれなくてもよいのです。私はいつも貴女の私にたいする親切には感謝の思いでいることでしょう」と書く時、クリックは「心優しい、上品で公正な態度の現れとして、あるいは自分にたいする憐憫の情を伝えるものとして、さらにはベールで隠した非難とも解釈できるであろう。まるで彼女が本当は自分に応しくないと彼を考えており、親切心から言ったまで、と言うかのようだ」とも読めると皮肉<sup>53)</sup>る。『葉蘭を風にそよがせよ』で、ローズマリーがゴードンに与えた愛の形では、オーウェルは報われなかったのである。

また、オーウェルはブレンダー・サーケルド (Brenda Salkeld) からも結婚の申し出を断わられている。彼女とは彼が生涯を通じて交際のあった女性であったが、彼女は彼のことを、「女性を理解していない、献身的なことのできない人」とも、「あの人は、本当は女性が好きではなかった」ともきめつけ<sup>54)</sup>る。彼女に対して執拗といえるほどに愛を求めたが、彼女には友情しか感じられなかったのである<sup>55)</sup>。

オーウェルの小説同様、実生活でも女性たちが彼にとって盲点になっていたようだ、と P. ルイスはきめつけ、さらに次のように書いている。

オーウェル自身は、自分が魅力的でないから女性にはもてないと思い込みがちをしていたことは別にしても、彼を好きだった何人かの女性

は、彼のことをどこか感情的に欠けている人間だと考えていた。ある女性は「奇妙なほど鈍感な人だった」という言い方をした。最初の妻を亡くしたあと、彼は必死になって後添えを探し、ろくに交際もしないうちから何人かに結婚を申し込んで断られたりしている。そのうちの1人の女性はこう語っている。「偶然私が彼の眼にとまって、私のことなど何も知らないくせに、“この人こそ自分の理想の女性”とあの人は思いこんでしまったようです。私には、こういう形で男性とお付き合いを始めるなんて、とても考えられないことでした。お付き合いしながら彼のことをだんだん知って行く機会も与えられていなかったんですもの。でも結婚を考えるからには、相手の方を長いお付き合いからよく知ることがどうしても必要なことに思えたのです。」また、別の女性は「彼は私を愛してくれていたとは思いますが、彼にはロマンチックな恋愛感情などはなかったのではないのでしょうか。あの人は本当にデリカシーのない男性でした。彼との結婚を私が思いとどまったのも、そのへんが原因ではなかったかと思います。」

オーウェルの親しい女友達の1人は、「彼の場合、女の人がそばにいるのは好きだったけれども、実は女性には関心がなかったのでしょうか」とまで言っている。おそらく結婚した妻たちを別にしたら、女性に対するオーウェルの愛情は、養子の息子に注がれた愛情と比べてだいぶ冷たいものではなかったかと思われる。その養子は彼が死んだとき、まだ5歳にもなっていなかった。<sup>56)</sup>

妻となるアイリーン・オショーンネシー (Eileen O'Shaughnessy) との出会い<sup>57)</sup>は1935年3月、「あの人こそ、私が結婚したいと思うような女性だ!」とオーウェルに言わしめたが、翌年結婚して3年のちも、子供は生まれなかった。その原因が自分にあると彼は考えたようで、なぜそのように信じたかは、明らかでない。B. クリックによれば、「彼が子種のない罪を自己批判的に背負っ

たのは奇妙なことで、子供を作るには2人いるのである<sup>58)</sup>」と皮肉を言っている。

彼は、言いようのない劣等意識に苛まれたことと想像するが、2人とも非常に子供を欲しがったこともあって、養子をもらうことになる。

妻アイリーンは、夫が妻よりも仕事を優先する人間であることも、作家にはやむを得ない身勝手と理解する献身的な女性であったことをP.ルイスは『1984年への道』で証言しているが、病気がちな自分の身体が第二次大戦下のひどい状態のなかでどれほど悪化していたか、気がついていない様子の夫に内心あきらめの気持ちではなかったろうか。1945年、彼女は手術のための麻酔がもとでショック死をしてしまう。39歳であった。

その後、オーウェルは食糧品をはじめ何もかも不足していた時に、精力的に育児に最大の精力を費やしていたが、1949年10月、ソニア・ブラウネル(Sonia Brownell, 31歳, 1980年他界)と再婚する。場所は、彼の入院先の病室であった。

なぜ、彼が二度目の結婚をする気になったかは明らかでない。推測になるが、彼自身が余命いくばくもない状態(結核の悪化により結婚式後3か月で死去)であったことから、相手女性を愛していたことは当然であろうが、結婚することで何とか延命が可能になれば、また、可能になりはしないかという夢を托したのかもしれない。そして、残された最愛の息子の世話をしてくれる女性、という気持ちが強く作用したのではあるまいか。相手が遠からず未亡人になってしまい、1人の女性を不幸にするであろうという心遣いをする精神的余裕がなかったとしても非難するにはあたらないと考える。

本稿では4つの小説を取り挙げたが、これらの作品からも、以外の作品の随所からも、オーウェルには男性は女性に優るという、即ち, predominance of man over woman の思想をもっていたことが窺える。「オーウェルの世界においては、女性は知的でない<sup>59)</sup>」とは、オーウェルの作品の出版者である F. J. ウォーバークの至言であろう。

## 註

- 1) Tom Hopkinson, *George Orwell* (Longman Group Ltd., 1962), pp.16-17.
- 2) George Woodcock, *The Crystal Spirit : A Study of George Orwell* (Little Brown & Company, 1966), pp.39-40.
- 3) George Orwell, *A Clergyman's Daughter* (Penguin Books Ltd.,1966), p.76.
- 4) *Ibid.*, p.11.
- 5) *Ibid.*, p.135.
- 6) *Ibid.*, p.137.
- 7) George Orwell, "Letter to Brenda Salkeld" (1935). *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell* (Penguin Books Ltd.,1970), Vol. I, p.174 (以下 C. E. J. L. と略記).
- 8) George Orwell, "Letter to Henry Miller" (1936). *C. E. J. L.*, Vol. I, p.258.
- 9) George Woodcock, *The Crystal Spirit : A Study of George Orwell* (Schocken Book Center Inc.,1984), p.133.
- 10) George Orwell, *A Clergyman's Daughter*, p.169.
- 11) *Ibid.*, p.177.
- 12) *Ibid.*, pp.211-3.
- 13) *Ibid.*, p.261.
- 14) *Ibid.*, p.75.
- 15) *Ibid.*, p.41.
- 16) *Ibid.*, p.249.
- 17) Richard Rees, *George Orwell* (London: Secker & Warburg, 1961), p.35.
- 18) George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying* (London: Secker & Warburg, 1954), p.21.
- 19) *Ibid.*, pp.52-53.
- 20) George Orwell, "The English People" (1947). *C. E. J. L.*, Vol. III, p.36.
- 21) George Orwell, *The Road to Wigan Pier* (London: Secker & Warburg, 1937), pp.143-44.
- 22) Bernard Crick, *George Orwell : A Life* (London: Secker & Warburg, 1980), p.16.
- 23) George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying*, p. 147.
- 24) *Ibid.*, p.137.

- 25) *Ibid.*, p.37.
- 26) Christopher Hollis, *A Study of George Orwell* (London : Hollis & Carter, 1956), p.70./Laurence Brander, *George Orwell* (London : Longmans, 1956), p.104. Richard Rees, *George Orwell* (London : Secker & Warburg, 1961), p. 37.
- 27) George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (London : Secker & Warburg, 1949), pp.160-61.
- 28) George Orwell, *Burmese Days* (Penguin Books Ltd., 1949), p.7.
- 29) George Orwell, *The Road to Wigan Pier* (London : Secker & Warburg, 1937), pp.143-44.
- 30) Jeffrey Meyers, *A Reader's Guide to George Orwell* (Thames and Hudson, 1984), p.35.
- 31) George Orwell, *The Road to Wigan Pier*, pp.143-44.
- 32) Daphne Patai, *The Orwell Mystique* (The University of Massachusetts Press, 1984), pp.24-25.
- 33) George Orwell, "Shooting an Elephant" (1936). *C. E. J. L.*, Vol.I, p.270.
- 34) George Orwell, *Burmese Days*, pp.38-39.
- 35) *Ibid.*, p.270.
- 36) *Ibid.*, p.254.
- 37) George Orwell, "Letter to F. Tennyson Jesse", *C. E. J. L.*, Vol.IV, p.142.
- 38) George Woodcock, *The Crystal Spirit : A Study of George Orwell*, p.72.
- 39) *Ibid.*, p.73.
- 40) Maung Htin Aung, "George Orwell and Burma", *The World of George Orwell* (London : Weidenfeld & Nicolson, 1971).
- 41) George Orwell, *The Road to Wigan Pier*, pp.146-7.
- 42) *The Listener*, 29 May, 1969, p.755.
- 43) *Ibid.*
- 44) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*, p.80.
- 45) Peter Stansky and William Abrahams, *The Unknown Orwell* (Paladin Grafton Books, London, 1974), p.190.
- 46) *Ibid.*, p.202.
- 47) George Orwell, *The Road to Wigan Pier*, p.149.

- 48) *Ibid.*, p.123.
- 49) Peter Stansky and William Abrahams, *The Unknown Orwell*, p.125.
- 50) George Orwell, *Such, Such Were the Joys* (New York : Harcourt, Brace & Company, 1945), pp.52-53.
- 51) Jacintha Buddicom, "The Young Eric", *The world of George Orwell*, ed. by Miriam Gross (Weidenfeld & Nicolson, 1971), p.6.
- 52) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*, p.105.
- 53) *Ibid.*, (Penguin Books Ltd., 1981), pp.230-31.
- 54) Peter Stansky and William Abrahams, *The Unknown Orwell*, pp.245-46.
- 55) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*, (Penguin Books Ltd., 1981), p.238.
- 56) Peter Lewis, *George Orwell : The Road to 1984* (New York : Harcourt, Brace and World, 1981), pp.10-11.
- 57) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*, (Penguin Books Ltd.,1981), p.267.
- 58) *Ibid.*, p.269.
- 59) Frederick Warburg, "Publisher's Report", *George Orwell : The Critical Heritage*, ed. by Jeffrey Meyers (London : Routledge,1975), p.248.